

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.05)

「沢山キスして」

・・・メキシコより愛を込めて・・・

ある報道によると、先月2月14日のバレンタインデーに、まさに驚きとしか言えない世界記録が当地で達成された。メキシコの世界遺産登録の場所であるソカロ(憲法広場)で、4万人近いカップルらが一斉にキスするイベントが開かれたのだ。

立ち会ったギネスの関係者は、「会場には4万2225人がいたが、残念ながら全員が参加できたわけではなかった」と指摘しながらも、参加者は3万9987人に上ったとし、英国でのこれまでの世界記録(3万2648人)を塗り替え世界新記録と認定したという。

今回のイベントは、メキシコで頻発する麻薬組織間の抗争や凶悪犯罪などを含む暴力への反対をアピールするのが狙いだといひ、また、公の場でのキスを禁止しようとする地方首長らへのメッセージも持たせたという。関係者の1人は、「この一斉キスは、あらゆる自由を尊重するという、メキシコから全世界に向けたメッセージだ」と語ったという。

キスにこんな高尚なメッセージを込めたとは、想像外のことだし、参加者の数を最後の一桁まで計測した事と、キス実行者が奇数ということは、誰かあぶれたのか、複数でキスしていたのか、野暮な疑問が湧いてくる。

メキシコでは、こんなイベントを催さなくても、街中のいたるところ、時間に関係なくこの光景は見られ、この行為は個人の感覚の問題で難しいだろうが、公の場でキスを禁止しようとする首長が出てきても、おかしくはないと思ってしまう。

年端も行かない男女が人前をはばからず、濃厚なキスを交わしているのを見ると、「お若いの！おめえさん方、そんなことをしている場合

ではねえの。他にやることがいっぱいあるのではねえのけ！」などと、スペイン本国の人が聞いたら、中南米なまりの入った私のスペイン語では、こんな風に聞こえるだろうという感じで、声を掛けたくなる。実際は声をかけたことは無いが。

蛇足ながら付け加えると、この「お若いの」という呼びかけは、「**Joven**」(ホーベン)や「**Jovencito**」(ホーベンシート)と言い、こんな老人の私でも、街中で時々このように声を掛けられるから、つい書いたものである。

このイベントの前日、出勤時に職場の仲間達といつもの通り挨拶を交わしたとき、「いや～、今日はカップルのキススタイルが多く見られたよ、多分明日のために、朝から練習をしているのかも知れない」とジョークをかましたところ、居合わせた連中は皆大笑いであった。ボラッチョ・ボニート氏のスペイン語会話もまんざらではないわいと、心の中で快哉を叫んだのであった。(´q`)

なお、さらに蛇足を付け加えると、2年前の5月にこの由緒ある広場で、18000人ものヌードの男女



ベサメ・ムーチョ(沢山キスして)こんな刺激的なイベント参加者呼びかけポスターがみられた。・・・インターネットより借用

が集まって、ある写真家の指示のもと撮影が行なわれ、過去最高のスペインのバルセロナの7000人を更新したという記録もある。

こんな催しを考え出す感覚と、それを許す土壌、さらにはよくもまあ沢山の人が夢中になれるものだと、あきれより感心してしまう。このソカロ近辺はかつて古代アステカ帝国の心臓部であり、生贄などを祭った神聖な所でもあった。「キスに裸」と来れば、次はどんな風に世間を驚かさすイベントが、この歴史的に由緒ある広場で繰り広げられるのだろうか？

上記の経緯からタイトルに採用したのは、「**Bésame mucho**」(ベサメ・ムーチョ)という単語で、意味はタイトルに記したもののずばりである。この単語には、若き青春時代を思い出させる。「おお！」と身を乗り出さないで戴きたい。タイトルに込められたような、ラブロマンスではない。

1959年に、メキシコの3人組バンド、「トリオ・ロス・パンチョス」が初来日を果たし、この「**Bésame mucho**」の曲を披露して、それ以来日本でも広く流行したものである。私がラテン音楽を好きになったきっかけも、このバンドの歌を聴いたことからだし、易しい歌のフレーズから、スペイン語の意味も分からず、最初に原語で覚えたのもこの歌である。

その当時は知らなかったが、この歌を作詞・作曲したのが、メキシコの女流ピアニストで、ソングライターのコンスエロ・ベラスケスさん(2005年1月88歳で死去)で、この曲は私が生まれた年に作られたという、歴史的な歌なのも、何かの因縁めいたものが感ぜられる。

メキシコへ2回も着任したのも、原点はこんなところの深層心理が働いていたのかもしれない。

**Bésame, bésame mucho,
Como si fuera esta noche la última vez.
Bésame, bésame mucho,
Que tengo miedo perderte,
Perderte después**

たくさんキスして、キスして
まるで今夜が最後であるかのように
たくさんキスして、キスして
後であなたを失ってしまうのが怖いから
(ベサメ・ムーチョの一節、筆者翻訳)

しかしこの曲、私は、単なる甘い恋歌と思っていたのだが、ある音楽評論家の説によると、『「ベサメ・ムーチョ」は、ベラスケスさんの女ともだちの夫が、入院中なので見舞ったとき、容態が思わしくなく、自分の最後が近いことを悟っていた病床の夫君が、夫人に、『沢山キスして』とせがんだということを知って作った歌だというのである。』

確かに、歌の全編を通してみると、ラブソングとも取れるし、上記の説のようにも取れなくはない。

何ともロマンを感じず話なので、私は両方の説を合わせてとりたいくらいである。だが、自分の死期を悟ったときに、「沢山キスして」とは、多分思いもつか

ないだろう。こんなところも日本人とメキシコ人の違いのある一端かもしれない。

では、メキシコより愛を込めて、最後まで本文を読んでくださった方々に、「**Muchos abrazos y besos**」(沢山の抱擁とキスを)(メキシコ人の親しい人たちの別れ際の挨拶であったり、手紙文の末尾にもつけることがある。男性間では余り使わないと思うが、お許しを) (2009年3月5日)